



Title	学問の身体と精神 : 1070年ごろ以降の初期スコラ学の学校についての観察
Author(s)	レックスロート, フランク; 田口, 正樹//訳
Citation	北大法学論集, 69(5): 76[107]-45[138]
Issue Date	2019-01-30
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/72420">http://hdl.handle.net/2115/72420</a>
Type	bulletin (article)
File Information	lawreview_vol69no5_04.pdf



[Instructions for use](#)

# 学問の身体と精神：1070年ごろ以降の 初期スコラ学の学校についての観察

フランク・レックスロート  
田口 正樹 訳

ペトルス・アベラルドゥス、および彼の一生と学術的偉業は、以前から知られており、しばしば論じられてきた。弟子の女性エロイズと彼の悪名高き恋愛事件は、既に彼の生前から、ヨーロッパに知れ渡っていた。1300年頃にジャン・ド・マンが彼の作品『バラ物語』でこの事件に言及したとき以降、この話は恋愛譚として理解され、それによって、アベラルドゥスとエロイズに、規律に従った修道院生活の治癒効果によって救われた二つの危機に瀕した魂を見る古い読み方は駆逐されてしまった。エロイズの伯父フルベールの委託によるアベラルドゥスの去勢は、おそらくこの話の最も顕著で刺激的なディテールとして、繰り返し考察されてきた<sup>1</sup>。

アベラルドゥスが浩瀚でかつそれ自身が複雑な一つの学術作品を遺したことも知られているが、彼は20代初めからほとんど1142年の彼の死のときまでずっ

---

<sup>1</sup> 以下のテキストは、2018年秋に出版された西洋の学問の初期史に関する私の著書 (Frank Rexroth, *Fröhliche Scholastik. Die Wissenschaftsrevolution des Mittelalters*. München 2018) の一部である。私のテーゼを日本語でも公表することについて、田口正樹氏に深く感謝する。また、関西中世史研究会の皆さん (彼らとは2018年3月21日に京都大学でこのテキストに関して議論することができたのだが) にも、建設的なコメントをいただいたことについて御礼を申し上げる。以下の注からは、既に上記著書の執筆段階で私がある日本人学者の学殖豊かな研究にどれほど多くの情報を負っていたかが、明らかになるであろう。

とこの作品に携わったのであった。それ以来彼は哲学者にとっては「史上最大の論理学者の一人」（ケンブリッジのジョン・マレンボンはこう書いている）であり、既に先行するフランスの教師たちの世代が弁証法を神学的諸問題の検討のために用いていたとはいえ、やはりアベラルドゥスの神学こそが、彼の弟子たちを惹きつけ、同時代の批判者たちを彼に対する異端の非難へと駆り立てたのである。二つの教会会議、つまり1121年のソワッソン教会会議と1141年のサンス教会会議は、恋愛事件と同様やはりアベラルドゥスの物語に属する。彼の自伝的な『ある友に宛てた慰めの手紙』、これは『災厄の記』として知られており、おそらく1132年に著されたものだが、その中でペトルスはこの二度の断罪のうち最初のを、去勢に匹敵するような破局として扱っている。

アベラルドゥスから出発して、「高等な」知の歴史を物語るのは容易である。彼はある一つの物語以上のものを提供しているからである。しばしば「12世紀ルネサンス」、あるいはより慎重に「12世紀における学問のルネサンス」と呼ばれているものは、ある場合には、1200年ごろ以降のヨーロッパの大学の成立と成功の歴史に向けて目的論的に物語られ得たが、そうした場合にアベラルドゥスは弟子たちの集団とともに、教える者と学ぶ者の一種のカルテルへと結集していったパリの教授たちを先取りする存在であった。制度に対する懐疑主義者と文化に関する悲観論者たちが大学を、むしろ自由な精神をカリキュラムと決まりきった学位取得手続で締め上げる組織的な枠組と見なす場合には、12世紀のごく弱く規制されていたにすぎない自由な学校状況は、ヨーロッパ教育史の中でほとんど無政府的なすばらしい間奏曲と見なされた。世俗当局による監視は、例えばペーター・クラッセンの読み方によれば、グレゴリウス改革とともに学校に対する介入力を喪失し、一方聖職者教会の規律化手段は教皇インノケンティウス3世より前の時代にはまだ存在しなかったということで、つまり前後の社会的規律化の時代の間にある無人地帯だったというわけだ。この時代と取り組むならば、例えばサー・エドワード・サザンがこの示唆的な解釈提案に屈したような危険にさらされることになるわけである。

1070年ごろから大学の成立までの期間における諸学問のルネサンスに対する私自身の取り組みは、それゆえこの二つの語りの水路に入り込まないように注意しなければならない、つまり一方で大学という衣をまとった西洋の学問の誕生という英雄的な水路、他方ですべてのありうる時代のうちで最も美しい時代というノスタルジックな水路である。その際、私には、私以前の他の学者たち

と同様まず第一に、この時代のどのような種類の社会的共同体化をどのような認識論的変化が可能としたのか、そして逆に、高度な知を運搬し変化させた社会的諸形式がどのようなやり方で学識的な知に関する同時代の諸観念に沈殿したのかを問うことが問題なのである。

私の今日の主要な関心事は、私の見方ではやましいところなく初めて学問的なコミュニケーションとして理解しうるような、新しい学識的コミュニケーションの始まりに一瞥を与えることである。それはアベラルドゥスよりおよそ2世代前の教師たちの世代、1070年ごろに始まり、それぞれ一人の教師と一群の弟子たちからなる社会的諸集団の成立という形で世に明らかになるが、彼らは修道院にも、大聖堂学校や参事会教会で規則に従って生活していた聖職者たちにも結びつけられていなかった。制度的に束縛されていない自由な教師たちは少数であれば既にその前から存在していたが、この時期の彼らにおいて新しくなったのは、集団で生きることが、目的のための手段ではなく知の産出の本質的構成部分だと見なされたことである。

この新たに形成された諸集団のうち、1070年代以降自由学芸的な、あるいはより良い言い方をすれば哲学的な知の獲得に没頭していたような集団における思考と議論を、我々はどうのように観念しなければならないであろうか。1, 5世代後、1110年ごろから後に、振り返って学校の形成という現象を理解できるものにしてしようとした人びとの視角から、この時代を観察することを試みてみよう。

興味を抱いた同時代人たちは、この時代以後、新しい学問を歴史家の目で観察することを始めた、つまり学者たちとその弟子たちの始まり、系譜、特有の業績に突然興味を抱くようになったのである。フルーリー修道院の周辺に由来する以下の年代記の報告は、社会的空間において現実を作り変える新しい力として学問を記録した、フライジングのオットー、ソールズベリのヨハネス、トリニーのロベルトゥス、ティルススのゲイレルムス、ウェールズのゲラルドゥスといった一連の歴史叙述家全体の最初に位置していた。学問の歴史は同時代史として関心の地平にせり出してきたのである<sup>2</sup>。

<sup>2</sup> オットーについては、Frank Rexroth, Fehltritte. Otto von Freising, der Prozess gegen Gilbert von Poitiers und die Kontingenz der sozialen Kommunikation, in: Markus Bernhardt/Stefan Brakensiek/Benjamin Scheller (Hg.), Ermöglichen

ささやかな始まりから一つの運動全体が生じることになったというのが、ひとまずは目立たないこの短いパッセージの核心であるが、この一節は叙任権闘争、アンジュー伯領、ウィリアム征服王の死(1087年)についての諸報告に無理なく付け加えられている。

「この時期、神の智恵も人の智恵も栄えていた。カンタベリ司教ランフランクス、ロンバルディア人ガイド、ドイツ人マネゴルト、[そして]ランスのブルノ、彼は後に隠修士の生活を送った。弁証法においては、以下の人びとが主要なソフィスト[論理学者のこと(F. R.)]たちであった。弁証法は言葉についての学問であると教えたヨハネス、パリのロベルトゥス、コンピエーニュのロスケリヌス[および]ランのアルヌルフス。後の人たちはヨハネスの門弟であったが、彼らがまた多くの聴衆を持っていた<sup>3</sup>。」

匿名の年代記作者は、神学的知と世俗的知の効果的な統合への道を見出したあの画期の時代に興味を示しており、その学者たちの伝記が教会における役職の引き受けや世界からの逃避で終わるのでなく、まさに逆に彼らがこの世で学者の数が増加するよう気を配ったということが重要だと見なしていた。明らかにこれが、列挙を二分することを書き手に促したものである。つまり、第一のグループは、ランフランクス、ブルノ(そしておそらくマネゴルト)で、

---

und Verhindern. Vom Umgang mit Kontingenz (Kontingenzgeschichten, Bd. 2), Frankfurt am Main 2016, S. 83-115. ティルスのゲイレムスについては、Rainer Christoph Schwinges, Kreuzzugsideologie und Toleranz. Studien zu Wilhelm von Tyrus (Monographien zur Geschichte des Mittelalters, Bd. 15), Stuttgart 1977, S. 23-29を参照。全般について、Richard W. Southern, Scholastic Humanism and the Unification of Europe, Bd. 1: Foundations, Oxford 1995; Bd. 2: The Heroic Age, Oxford 2001, S. 195-197.

<sup>3</sup> Delisle, Léopold (Hg), Recueil des Historiens des Gaules et de la France, Nouvelle Édition. 24 vols., Paris 1869-1904, Bd. 12, S. 3: Hoc tempore, tam in divina quam in humana philosophia floruerunt Lanfrancus Cantuariorum episcopus, Guido Langobardus, Maingaudus Teutonicus, Bruno Remensis, qui postea vitam duxit heremiticam. In Dialectica quoque hi potentes extiterunt Sophistae; Joannes, qui eandem artem Sophisticam vocalem esse disseruit, Rotbertus Parisiacensis, Roscelinus Compendiensis, Arnulfus Laudunensis. Hi Joannis fuerunt sectatores, qui etiam quamplures habuerunt auditores. artem [...] vocalem を「言葉についての学問」と訳すことについては、本文を見よ。

重要な教師として始めたが、しかしその後学校から出て修道院ないし擬似修道院的な規律のもとへと移っていった人々を含んでいた<sup>4</sup>。第二のグループは、4人のソフィスト *sophistae* で、いわばプロフェッショナルな「純粋な」学者の名を挙げていた。彼らの名はこの世で第一のグループの人びとほど輝いてはなかったが、学校 *schola* という社会形態を宣伝し、その際特有の哲学的立場を広めた。彼らはすべて、文法的な立場に依拠し、そして一対抗する見方に反して、と補足してもよいと思われるが一現実に関する学問でなく、この現実の言語的再現についての言明を行うような弁証法を営んでいた。この匿名年代記の一節は、1070・1080年代に現れた新しい学識パラダイムの始まりを記録したものであった。それは、教師活動から結果として生じうる数多くの伝記的可能性を紹介していたわけである<sup>5</sup>。

まさにこの、匿名年代記への記入が代表する変化にもとづいて、我々はこの時代以降綱領的に、従来のような高度な知の代わりに学問を語るという決定を

<sup>4</sup> この点は、マネゴルトについては、読み手の思量によって補足されうるのかもしれない。マギステル・マネゴルドゥスは、ラウテンバッハ、ロッテンブーフ、マールバッハの律修参事会員になったのである。Irène Caiazzo, Manegold, „modernorum magister magistrorum“, in: Irène Rosier-Catach (Hg.), Arts du langage et théologie aux confins des XI<sup>e</sup> et XII<sup>e</sup> siècle. Textes, maîtres, débats (Studia artistarum, Bd. 26), Turnhout 2011, S. 317-345; Horst Fuhrmann, Zur Biographie des Manegold von Lautenbach, in: ders. (Hg.), Papst Gregor VII. und das Zeitalter der Reform. Annäherungen an eine europäische Wende. Ausgewählte Aufsätze, hg. v. Martina Hartmann (Monumenta Germaniae Historica Schriften, Bd. 72), Wiesbaden 2016, S. 267-290; Manegold von Lautenbach, Liber contra Wolfelmum, übers. v. Robert Ziolkowski, Paris/Leuven/Dudley, MA 2002.

<sup>5</sup> ランフランクスはカンタベリー司教(1070年以降)と表記され、ブルノについては、彼は後に隠修士の生活を送ったと言われている。この点はおそらく、1084年のセシュ・フォンテーヌ Sèche-Fontaine の隠修士集団の設立と結びつけてよいであろう。認識論的転回についての、似たような同時代的観察は、13世紀に、例えば1283/84年にマリヌ Malignes のヨハネスにおいて再び見出される。Marcel Bubert, Nützliche Philosophie. Zur Genese einer diskursiven Formation im Umfeld der Pariser Universität um 1300, Diss. (masch.) Göttingen 2016, Anm. 257.

下しているのである。

一つの根本的な変化のこの側面が、跡付けられねばならない。新しい諸学校において、知はもはや手入れされ、保存され、学問外の諸目的のために選別されるのではなく、集団のためのプロジェクトとして理解された。この分野に特徴的な新しい文献形式で始めることで、この現象に接近してみよう。つまり、匿名の注釈コメントールであるが、それらはより古い世代の教師たち（ランスのブルノ、マネゴルト、ベレンガリウス）については知られていないものである。

早い時期に位置づけられるのは怪しげなヨハネスであるが、前述の年代記は彼を新たな哲学の創始者のように呼んでいる。彼は1076・77年にランスで教えた文法学者と推測されており、当時の最も独創的で大胆な諸作品のうちの一つと結びつけられている。それは一つの注釈作品で、プリスキアヌスの『文法 Institutiones grammaticae』の最初の16巻を解明していたが、しかしその際プリスキアヌスとは違って、対象を論理学の部分学問として規定していた。中世初期・中期哲学の最良の精通者の一人は、この作品を「この時期の知的生活の最も著しい記録の一つ」と呼んだ<sup>6</sup>。このいわゆる『グロスーレ Glosulae』によれば、文法にとってはもはや、語を正確に接ぎ合わせて文へ導くことでなく、もっと根本的に世界に関する真の言明へ導くことが問題なのであった<sup>7</sup>。ヨハネスの次の教師世代に位置づけられるのは、パリのロベルトゥス、コンピエーニュのロスケリヌス（アベラルドゥスに影響を与えた最初の、しかし『災厄の記』では完全に黙殺されている教師）そしてランのアルヌルフスである。後の二人については風刺詩が書かれ、そこでは弁証法についての彼らの学説がからかわれていたが、それはもはや道徳家的ないわゆる反弁証法論者的スタイルによって

---

<sup>6</sup> John Marenbon, *Medieval Philosophy. An Historical and Philosophical Introduction*, London, New York 2007, S. 134f.

<sup>7</sup> 1970年代末以来強い関心を引いてきた、いわゆる Glosule の研究史は、Anne Grondeux/Irène Rosier-Catach, *Les „Glosule super Priscianum“ et leur tradition*, in: Irène Rosier-Catach (Hg.), *Arts du langage et théologie aux confins des XI<sup>e</sup> et XII<sup>e</sup> siècle. Textes, maîtres, débats* (Studia artistarum, Bd. 26), Turnhout 2011, S. 107-179 から出発して知ることができる。Glosule をヨハネスに帰すことについては、Constant J. Mews, *Reason and Belief in the Age of Roscelin and Abelard* (Variorum Collected Studies Series, Bd. CS730), Aldershot 2002, 7 – S. 4-34, v.a. 33.

書かれていたのではなく、彼らが見たところ誤った言語観に取り付かれていたからであった<sup>8</sup>。

ロスケリヌスとアルヌルフスを現存する作品に著者として割り振ることができかどうかは争われている。しかしありそうなこととしては、ロスケリヌスは、彼の師ヨハネスが始めたかもしれない、プリスキアヌスの文法書に対する前述の『グロスーレ』を引き受け、改訂し、そこからおよそ言語についての彼の理解を引き出したと考えられる。当時の教育状況に特徴的なこととして、我々はロスケリヌスの姿を十分はつきりと見ることができると思うのであるが、ただしそれは彼の立場を退けた競争相手の教師による他者の目を通してのみなのである。つまりカンタベリーのアンセルムスと彼自身の弟子ペトルス・アベラルドゥスの目を通してである<sup>9</sup>。前者は教皇ウルバヌス2世に宛てたある書簡で彼のことをあざけている。ロスケリヌスは1090年代初めのある教会会議でそれを受けてみずからの立場を保証しなければならなかった<sup>10</sup>。サー・リチャード・サザンはこれらの所見から、至るところでトラブルを起す男のイメージを作り出している<sup>11</sup>。

きわめて捉え難いのがガーランドゥスという教師で、彼を同名の他の教師たちから区別するのは一仕事であるが、彼は弁証法に関する通例になく個別研究的な論文の著者として注目された。彼は論理学に関する古典古代の諸作品を指向しつつ、それらに関する既存の概説に手を加え、しかしそこからある程度の

<sup>8</sup> これらのテキストはバンベルクに至り、そこで1102/1125年の詩の集成の中にたどりついた。ここでそれらは、ある伯の娘のための墓碑という文脈で理解される。この点は、注意されるべき関連である。Codex Udalrici, hg. v. Klaus Naß, 2 Bd.e (MGH Die Briefe der deutschen Kaiserzeit, Bd. 10,1-2), Wiesbaden 2017, Bd. 1, S. 9-11. 関係箇所の事前送付とその他の情報について、クラウス・ナスに感謝する。

<sup>9</sup> C. J. Mews, Reason (2002), 7 – S. 4-34. Ebd., 例えば S. 26 を参照。ロスケリヌスは Glosulae から人に関する彼の諸観念と「全体としての言語についての彼の理解」を引き出している。

<sup>10</sup> C. J. Mews, Reason (2002), 6 – S. 55-98, 7, S. 4-34; Abaelard/Heloise, Letter Collection, hg. v. D. Luscombe/B. Radice, S. 519-521, Appendix 1.

<sup>11</sup> Richard W. Southern, Saint Anselm. A Portrait in a Landscape, Cambridge 1990, S. 175f.



完結性をもった一つの作品を創り出した。論理学に関する中世のモノグラフの早い例である！<sup>12</sup> ラインベルトゥスという人物の授業も人気があったが、彼はリールで言語について省察する新しい弁証法の諸観点に沿った授業をし、それによって他の教師たちから弟子たちを背かせた<sup>13</sup>。

最後に、シャンポーのグイレルムス自身、これらの教師たちの中で明らかに最もカリスマに富んだ人物であるが、綿密な研究によって、伝存する一連の注釈作品および入門文献を彼に帰することが可能になっており、その結果彼の姿は例えばロスケリヌスや彼自身の師であるマネゴルトよりも我々にとってはっきりしたものになっている<sup>14</sup>。彼もまた、前述の『プリスキアヌスに関するグロ

---

<sup>12</sup> Garlandus Composita, [実は Gerland von Besançon], *Dialectica*, hg. v. Lambert Marie de Rijk, Assen 1959. 評価については、Martin M. Tweedale, *Logic* (i). From the Late Eleventh Century to the Time of Abelard, in: Peter Dronke (Hg.), *A History of Twelfth Century Western Philosophy*, Cambridge 1988, S. 196-226, S. 198-204; Eleonore Stump, *Dialectic*, in: David L. Wagner (Hg.), *The Seven Liberal Arts in the Middle Ages*, Bloomington 1983, S. 125-146, S. 135; ders., *Logic in the Early Twelfth Century*, in: Norman Kretzmann (Hg.), *Meaning and Inference in Medieval Philosophy. Studies in Memory of Jan Pinborg* (Synthese Historical Library, Bd. 32), Dordrecht 1988, S. 31-55. さまざまなガーランドゥスを区別しようという試みについては、„Biographical Register of Major Authors Represented in MS Oxford St. John’s College“: [http://digital.library.mcgill.ca/ms-17/fetchfoliodoc.php?target=BIOGRAPHICAL\\_REGISTER](http://digital.library.mcgill.ca/ms-17/fetchfoliodoc.php?target=BIOGRAPHICAL_REGISTER) (zuletzt 2018-04-06) を見よ。我々にとって重要なのは、Garlandus Composita と Gerland von Besançon の区別のおかげで、「1040年以前」という早い年代決定がもはや維持されないという点である。Yukio Iwakuma, „Vocales“ revisited, in: Charles S. F. Burnett (Hg.), *The Word in Medieval Logic, Theology and Psychology*, Turnhout 2009, S. 81-171; John Marenbon, *Logic at the Turn of the Twelfth Century. A Synthesis*, in: Irène Rosier-Catach (Hg.), *Arts du langage et théologie aux confins des XI<sup>e</sup> et XII<sup>e</sup> siècle. Textes, maîtres, débats* (Studia artistarum, Bd. 26), Turnhout 2011, S. 181-217, S. 187. 著者と彼の論文は我々の文脈に属する。

<sup>13</sup> Hermann von Tournai, *Liber de restauratione monasterii sancti Martini Tornacensis*, hg. v. Georg Waitz, in: *MGH Scriptorum (in folio)*, Bd. 14 (1883), S. 274-327, Liber 1f., S. 274f.

<sup>14</sup> 諸著作の帰属は、Cédric Giraud/Constant J. Mews, *Le „Liber pancrisis“, un*

スーレ』の助けを借りて文法を教えたが、その際この著作を改変して、更に彼の弟子たちに伝えた。つまりいずれにせよアベラルドゥスに、そしてひょっとすると後のソワッソン司教ゴスラン（ジョスラン、ガウスレヌス）およびパリのアルベリクスにも<sup>15</sup>。もちろんこれらの学校の外にも、同じ対象を扱い、しかし社会的位置がまったく異なった学者たちがいた。例えばベックのランフランクスとアンセルムス<sup>16</sup>、シャルトルのイヴォ<sup>17</sup>、また大聖堂学校の教師であったランのアンセルムスなどで、最後の人物のところをアベラルドゥスは最初に訪れ、そして論争した。彼は聖書の研究者として伝統的方法の枠内で活動していたとはいえ、やはり学者として視野に入れられる必要のある人物で、彼にとって学問は、人生の一部を占める通過点というのではなく、テキストと事物のより良い理解をめぐる絶え間ない戦いであった<sup>18</sup>。

大量でこのタイプのものとしてはまったく新しかったのは、これらの授業から生まれた書物である。しかしそれを再発見された古代のテキストのルネサン

---

florilège des Pères et des maitres modernes du XII<sup>e</sup> siècle, in: Archivum Latinitatis Medii Aevi 64 (2006), S. 145-192, S. 178; Rolf Schönberger/Andrés Quero Sánchez/Brigitte Berges u.a. (Hg.), Repertorium edierter Texte des Mittelalters aus dem Bereich der Philosophie und angrenzender Gebiete. 4 Bde, Berlin 2011, Bd. 2, S. 1653-1655 を参照。

<sup>15</sup> A. Grondeux/I. Rosier-Catach, *Glosule* (2011), S. 146f.; Constant J. Mews, „Logica“ in the Service of Philosophy. William of Champeaux and his Influence, in: Rainer Berndt (Hg.), *Schrift, Schreiber, Schenker. Studien zur Abtei Sankt Viktor zu Paris und zu den Viktorinern (Corpus Victorinum-Instrumenta, Bd. 1)*, Münster 2005, S. 77-117, S. 112.

<sup>16</sup> Alex J. Novikoff, *The Medieval Culture of Disputation. Pedagogy, Practice, and Performance*, Philadelphia 2013, S. 34-61.

<sup>17</sup> Christof Rolker, *Canon Law and the Letters of Ivo of Chartres (Cambridge Studies in Medieval Life and Thought 4, Bd. 76)*, Cambridge 2010.

<sup>18</sup> 彼の受容の変化については、John C. Wei, *The Sentence Collection „Deus non habet initium vel terminum“ and its Reworking, „Deus itaque summe atque ineffabiliter bonus“*, in: *Mediaeval Studies* 73 (2011), S. 1-118, v.a. S. 1-4 を参照。彼についての研究状況を代表するのは、Cédric Giraud, *Per verba magistri. Anselme de Laon et son école au XII<sup>e</sup> siècle (Bibliothèque d'histoire culturelle du Moyen Age, Bd. 8)*, Turnhout 2010. Vgl. *Abaelard/Heloise, Letter Collection*, hg. v. D. Luscombe/B. Radice, S. 525-527.

スの結果として理解することはできない。これらの新しい仕事に関係した参照テキストは、既に100年来使われていた。そうしたテキストとは、アリストテレスの『範疇論』と『命題論』、およびアリストテレス論理学の主要カテゴリーを解説することによってそれへの入門書となったポルフェリオスの『イサゴゲ』であった<sup>19</sup>。これら3つの作品は、まとめて『旧論理学』と呼ばれたが、一部は初心者向けに教育的に書かれており（ポルフェリオス）、一部は難解（アリストテレス）であった。既に古代末期の人たちが、『範疇論』というタイトルを口にしただけで、うぬぼれて頬を膨らます教師たちのことをからかっていた<sup>20</sup>。

我々がここで問題にしている教師と学生には、これらの作品はボエティウスの翻訳で知られていた。それらは更に、後期ローマの貴族でギリシア哲学の教養の媒介者であったこのボエティウス自身に由来する注解作品と個別テーマを扱った著作によって豊かにされた<sup>21</sup>。ボエティウスによる翻訳と彼自身の作品への集中が、980年ごろから1135年ごろまでの時代を、参照テキストの点では断絶でなく継続の時代、つまり「ボエティウス時代 *l'époque boécienne*」とし

---

<sup>19</sup> アリストテレスの論理学文献を含む現存最古の諸写本は、それどころか場合によってはカール大帝の宮廷に帰されうるかもしれない。Johannes Fried, Karl der Große, die Artes liberales und die karolingische Renaissance, in: Paul Leo Butzer/Max Kerner/Walter Oberschelp (Hg.), Charlemagne and his Heritage – 1200 Years of Civilization and Science in Europe. Vol. 1: Scholarship, Worldview and Understanding, Turnhout 1997, S. 25-43, S. 34f.

<sup>20</sup> John Marenbon, The Tradition of Studying the „Categories“ in the Early Middle Ages (until c. 1200). A Revised Working Catalogue of Glosses, Commentaries and Treatises, in: Sten Ebbesen/John Marenbon/Paul Thom (Hg.), Aristotle's „Categories“ in the Byzantine, Arabic and Latin Traditions, Copenhagen 2013, S. 139-173; Augustinus, Confessiones, hg. v. Kurt Flasch/Burkhard Mojsisch, Stuttgart 2009, 4.28.4, S. 54.

<sup>21</sup> Christian Vogel, Boethius' Übersetzungsprojekt. Philosophische Grundlagen und didaktische Methoden eines spätantiken Wissenstransfers (Episteme in Bewegung, Bd. 6), Wiesbaden 2016. ラテン人のアリストテレス *philosophus Latinorum* としてのボエティウスを示す史料箇所は Gangolf Schimpf, „Philosophia“ – „philosophantes“. Zum Selbstverständnis der vor- und fröhscholastischen Denker, in: *Studi Medievali serie terza* 23 (1982), S. 697-727, S. 709 Anm. 32 にある。

て現れさせるものであった<sup>22</sup>。それゆえ例えば、新しい学校を運営した教師たちは、弁証法が問題となった場合には、既に1世紀前にランスのゲルベルトゥス、つまり皇帝オットー3世の教皇シルヴェステル2世が身をかがめて参照したのと同じ論理学の著作について省察したのである<sup>23</sup>。

文法の学説も同様で、それは伝統的にプリスキアヌスの長く知られた『文法 Institutiones grammaticae』の説明に基づいていた。修辞学の授業は、キケロの『発想論 De inventione』と後期ローマの修辞家ガイウス・マリウス・ウィクトリヌスが著したそれについての注解、および誤ってキケロの作品と見なされた『ヘレンニウス弁論書 Rhetorica ad Herennium』に焦点を合わせたものであった。同時代人たちをプラトンの思考財に習熟させた諸著作は、それどころか既にカロリング期から標準テキストとなっていた。プラトンの『ティマエウス』、キケロの『スキピオの夢』に対するマクロビウスの注解、『メルクリウスの哲学との結婚』というタイトルで知られるようになったマルティアヌス・カペラの百科事典、そして再びボエティウスの作品である『哲学の慰めについて』などである。既に述べたように、これらすべての著作は長年よく知られていた。しかしそれでも、知の理解とそれとともにテキストとの接し方が、この時期に一変したのである。

<sup>22</sup> John Marenbon, *La logique en occident latin* (ca. 780 - ca. 1150). Le programme des études et ses enjeux, in: Julie Brumberg-Chaumont (Hg.), *Ad notitiam ignoti. L'Organon' dans la „translatio studiorum“ à l'époque d'Albert le Grand* (Studia artistarum, Bd. 37), Turnhout 2013, S. 173-191, 引用は S. 179; Aetas Boetiana については Marie-Dominique Chenu, *La théologie au douzième siècle* (Etudes de philosophie médiévale, Bd. 45), Paris 1957, S. 142. Vgl. M. M. Tweedale, *Logic* (1988), S. 196.

<sup>23</sup> Ebd., S. 196-198. 重要なのはまた、この正典が「非常に難しい著作」であったということである。Norman Kretzmann, Introduction, in: ders./Kenny Anthony/Jan Pinborg (Hg.), *Cambridge History of Later Medieval Philosophy. From the Rediscovery of Aristotle to the Disintegration of Scholasticism 1100 - 1600*, Cambridge 1982, S. 1-8, S. 5. 弁証法と修辞学の興隆については, Johannes Fried (Hg.), *Dialektik und Rhetorik im früheren und hohen Mittelalter. Rezeption, Überlieferung und gesellschaftliche Wirkung antiker Gelehrsamkeit vornehmlich im 9. und 12. Jahrhundert* (Schriften des Historischen Kollegs: Kolloquien, Bd. 27), München 1997.

新たに発見されたものへの熱狂ではなく、とりわけポエティウスの注解に対する不満感が、より実用的でより安価な諸作品の生産を解き放ったように見え、そうした作品が、成立しつつあった学問の最初の諸世代にとって特徴的なものになった。難しいテキストに注釈をつけること、つまり言語的・内容的な解説を付すことは、数世紀来行われてきた実践であった。それに対して1070年代以後成立した諸作品で目に付くのは、いかなる思考の動きも漏らさないような面的な注釈テクニックへの新しい努力で、このテクニックは全体として参照文献の完全な注解作業へ進む傾向があった。ポエティウスの注解そのものよりもより完全かつ詳細なものへ、である。この実践の基礎にあったのは、まさに比較的若く経験のない学生の側のテキスト理解に関する不安であったと推測されている。しかしテキスト理解を第一義とする完全な解明への意志は、知的なエネルギーをも動員した。選択的に手をつけることを、難解で同様にまた表面的のみ明白なパッセージを理解しようとする意志によって置き換えることは、注解者たちを助けて、まったく新たな深さでテキストを解明するようにさせたのである<sup>24</sup>。

---

<sup>24</sup> J. Marenbon, *Logic* (2011), S. 182-187. 注解諸作品の解明については、とりわけ岩熊幸夫が彼のウェブサイトで公開している材料を見よ。http://www.s.fu.ac.jp/iwakuma/papers/MastersII.pdf (zuletzt 2018-04-14). リストは John Marenbon, *Medieval Latin Commentaries and Glosses on Aristotelian Logical Texts, Before c. 1150 AD* (zuerst 1993), in: ders., *Aristotelian Logic, Platonism, and the Context of Early Medieval Philosophy in the West* (Variorum Collected Studies Series, Bd. 696), Aldershot 2000, Nr. 2, S. 77-140 (Kategorien, De Interpretatione; Porphyrios) で公表された。Yukio Iwakuma, *Alberic of Paris on Mont Ste Geneviève against Peter Abelard*, in: Jakob L. Fink/Heine Hansen/Ana María Mora-Márquez (Hg.), *Logic and Language in the Middle Ages. A Volume in Honour of Sten Ebbesen*, Leiden 2013, S. 27-47. 新論理学 *logica nova* については、また Sten Ebbesen, *Medieval Latin Glosses and Commentaries on Aristotelian Logical Texts of the Twelfth and Thirteenth Centuries*, in: Charles S. F. Burnett (Hg.), *Glosses and Commentaries on Aristotelian Logical Texts. The Syriac, Arabic and Medieval Latin Traditions* (Warburg Institute Surveys and Texts, Bd. 23), London 1993, S. 129-177; Neils J. Green-Pedersen, *The Tradition of the Topics in the Middle Ages. The Commentaries on Aristotle's and Boethius' „Topics“*, München 1984. 年代決定、特に年代を早くに比定する傾向の増大については、J.

学校で教師たちは、古代文献の逐語的理解への需要を満足させるようなテキストを産出した。その後12世紀もずっと下って1140年代以後になってはじめて、新たなテキストの「発見」が学問的思考の更なる変化を解き放つ。『新論理学』、特にアリストテレスの『トポス論』が、初めて学者たちに、知の基礎を革命的に変える「古書」が再発見されたという高揚感をもたらしたのである。

関心が向けられ始めて以来、これら11世紀末と12世紀初めの『旧論理学』への古い注釈作品は、ますます多く知られるようになった。それらの成立を早い時期に設定し、11世紀の最後の何十年かにあてる傾向は、目下より強まっているように見える<sup>25</sup>。それらの作品のカタログ化と、それ以上にそれらの関連と依存関係の理解は、繰り返し取り組まれてきた研究上の欠落で、専門家の国際的集団が従事してきた<sup>26</sup>。それらのカタログは、ジョン・マレンボン、岩熊幸男、

---

Marenbon, *Logic* (2011), S. 186: 「[...] 多くの作品については、11世紀後半から1120年代のどこかの時点への年代決定が可能である。」同様に秀逸な、特に初期に年代決定された諸注釈についての説明は、John Marenbon, *Logic at the Turn of the Twelfth Century*, in: Dov M. Gabbay/John Woods (Hg.), *Handbook of the History of Logic, Bd. 2: Medieval and Renaissance Logic*, Amsterdam 2008, S. 65-81, S. 68-70 には1115年ごろより前に位置づけられる初期の諸作品のリストがある。この文献ジャンルのその後の歴史については、Jan-Hendryk de Boer, Art. „Kommentar“, in: ders./Marian Füssel/Maximilian Schuh (Hg.), *Universitäre Gelehrtenkultur vom 13.-16. Jahrhundert. Ein interdisziplinäres Quellen- und Methodenhandbuch*, Stuttgart 2018, S. 265-318 を参照。

<sup>25</sup> この点について模範的なのは、Yukio Iwakuma, *Pseudo-Rabanus super Porphyrium (P3)*, in: *Archives d'histoire doctrinale et littéraire du Moyen Age* 75 (2008), S. 43-196. S. 52 u. 55で岩熊は、この注釈を先行研究よりも早い年代に比定している。

<sup>26</sup> 数年前に論集 Irène Rosier-Catach (Hg.), *Arts du langage et théologie aux confins des XI<sup>e</sup> et XII<sup>e</sup> siècle. Textes, maîtres, débats (Studia artistarum, Bd. 26)*, Turnhout 2011 が状況を描写した。ジョン・マレンボンによるアリストテレス論理学に関する1150年より前の注釈と注解のリスト化は、既に1993年時点の状態で印象的な長さであったが、8年後の再版の際には著しく補充され修正されねばならなかった。J. Marenbon, *Commentaries* (2000). 2007年にもなおマレンボンは、1150年以前に位置づけられうる100以上の知られている注解のうちで、確実に1090年以前に年代決定されうるものは一つもないと書いていたが、前述の Rosier-Catach 編集の論集を考えれば、新版においてはおそらくもはや

イレネ・ロジエ=カタク、アンヌ・グロンデュ、セドリック・ジロー、コンスタン・メヴスなどのような専門家によって書き進められ区分されている。

それらの理解を妨げる最大の要因が、それらを近代の著者ないし作品コンセプトを前提として理解しようとする点であるという点が、そこでは明らかになっている。というのは、ペトルス・アベラルドゥス自身の著作より前にはすべて匿名で伝わっているこれらの作品は、個人という考えからでなく、常に進展するコミュニケーションから生じたからである<sup>27</sup>。そうしたコミュニケーション自体がまた、それぞれの教師の共同体の内部で学生たちとの間で同時的なレベルで起き、通時的なレベルでは届けられたテキストを弟子が受取ることによって起き、その弟子がいつか彼自身の聴衆団を築いたのである。教えあるいは学ぶ者は、既存の諸作品を手にとり（例えば、既にいわゆる『グロスーレ』で我々が観察し得たように）、それらをモディファイし、それらに付加し、それらを自分の教説で使った。こうした作品は直線的にでなく層をなして成立したのである<sup>28</sup>。そこで方向付けを提供したのは、アリストテレス、ポルフュリオス、あるいはボエティウスの注釈を付された一次テキストの構成を維持するという実践で、しかもそれは新しい諸作品が論文や入門的著作 (Introductiones) に成長した場合でも、そうだったのである<sup>29</sup>。

ジョン・マレンボンはいくつかのテキストの適切な理解を明確にした。これらの論理学コメンタールは、ある特定の著者が責任を負い原著者の意図を出来る

---

そうは書かないことであろう。 J. Marenbon, *Philosophy* (2007), S. 132.

<sup>27</sup> 学者としてのアベラルドゥスとの取り組みは、かつて彼の神学的な諸判断をこの伝統の中に位置づけることから始まった。Heinrich Denifle, *Die Sentenzen Abaelards und die Bearbeitungen seiner Theologia vor Mitte des 12. Jahrhunderts*, in: *Archiv für Litteratur- und Kirchengeschichte des Mittelalters* 1 (1885), S. 402-469, 584-624.

<sup>28</sup> 例としては再びいわゆる偽ラバヌスがある。Y. Iwakuma, *Pseudo-Rabanus* (2008), S. 55 を参照。やはりイサゴーゲに対するボエティウスの注解を引くポルフュリオス注解は、岩熊によればシャンポーのグイレルムスに由来するが、2つのヴァージョン（パリ写本とアッシジ写本）の相違はグイレルムスの弟子たちにその責任があるという。

<sup>29</sup> ひょっとしたら前述のバリのロベルトゥスに帰されうるかもしれないリモージュの論文については、J. Marenbon, *Logic* (2011), S. 186-193.



だけ忠実に再現するような文献ではなく、教材であり同時代の教育実践の記録でもあった。そのようなものとして、それらは複数の教師の講義から生まれることもありえた。というのも、教師および生徒たちは明らかに、他人のコメントを利用し、補足し、改変することは全く自由だと感じていたからである。彼らは、マレンボンによれば、「本質的に匿名」であった。つまり我々後に生まれた者たちに残念ながら創始者の名が知られていないという世間一般の意味での匿名というのではなく、そうした創始者がそもそも一度も存在したことがなかったという限りにおいて匿名であったのである。「それらは一人の著者を持たなかった」のである！<sup>30</sup>

改変の背後にはしばしば、彼らの報告記録を改訂した弟子たちがいたようである。今日我々が、このずれを例えば対照表的な印刷で十分に視覚化しているような刊本を参照することができる場合には、弟子たちが教師の原本にいかにか創造的に接したかを評価することができる<sup>31</sup>。「これは…グイレルムスによる導入である」とか「G. バガネッルス師による弁証法への導入」などといった注記は、こうした成立の仕方の痕跡である<sup>32</sup>。これらのテキストは、あたかも、互いに複数の筆写・改訂行程を歩き回り縦横に動いたようないくつもの層から築き上げられているかのように、理解されなければならない。つまり、アリストテレスとポルフェリオスに基づいたボエティウスのテキストの広い層があり、そして互いに関連ししかし相互に浸透しあった形で、学校メンバーの複数の世代による同時代の補足があるというわけである<sup>33</sup>。

<sup>30</sup> Ebd., S. 197.

<sup>31</sup> 例えば Y. Iwakuma, Pseudo-Rabanus (2008), z.B. S. 85f. を参照。そこでは、下敷き Vorlage が次のように警告している。注意、「類 genus」と「種 species」という概念は多層的な意味を持つ、と。師は3つのそうした意味 significationes を挙げていたが、パリ写本の著者はそれを正確に受け取り、説明を始めている。

<sup>32</sup> Klaus Jacobi, William of Champeaux. Remarks on the Tradition in the Manuscripts, in: Irène Rosier-Catach (Hg.), Arts du langage et théologie aux confins des XI<sup>e</sup> et XII<sup>e</sup> siècle. Textes, maîtres, débats (Studia artistarum, Bd. 26), Turnhout 2011, S. 261-271, S. 263f.

<sup>33</sup> この経過のきわめて簡潔な叙述が John Marenbon, Abelard in Four Dimensions. A Twelfth-Century Philosopher in His Context and Ours, Notre Dame 2013, S. 25-27 にある。



いたずら者たちにとっては、彼らの観念にしたがってテキストを補充するよい機会であった。彼らの追加や例は、場合によってはまず欄外に付加されたかもしれないが、後の写本では本文に入り込んだ。„utrumlibet (2つのうちのどちらの場合でも)“はこのような状況のもとで、以下のような例に即して解説された。「彼女は性交するだろう haec futuet / 彼女は性交しないだろう」、「ペトルスはドアを閉める / ペトルスはドアを閉めない」、「ペトルスは便所に落ちる / ペトルスは便所に落ちない」。前者が本当らしい、と後進の哲学者は補足している。ペトルスは小さく、我慢強さは大きいからである。我慢強さ longanimitas は、誰かにとって便所へ行くことに長い時間がかかることの学生スラングなのだろうか。「ソクラテスは読む」、「G は性交する」といったようにしか論述できない動詞が存在することに注意せよ。」明らかに、ある学生が、伝統的なソクラテスの例の後に、いかにメッセージをよりわかりやすく伝えうるかという熱烈な考えを追求したのであった。それゆえテキストのただ中でまた、学者アダムがまさに物音を立てたことが、確認されるのである。「アダムが放屁した Adam pepedit」<sup>34</sup>。

これらの新しい実践は端緒的な形でしか再構成できないとはいえ、それでも、やがて学問的思考を形成することになったようないくつかの要素を認識することができる。これらの革新の最初のもものは、注釈と注解のなかに認められる自己参照性と反省性の程度に存した。後に眺めることができるように、アベラルドゥス時代には確立していたものであった。自己参照性と反省性は論理学の教説に現れていたが、その基礎的機能ゆえに広く関連を持つものになった。アリストテレスが『命題論』で言語を題材にしたということは明らかであった。しかし彼の他の諸著作はどうだったであろうか。ポルフェリオスの『イサゴーゲ』を通じてそれらに接近した（それは教育的に意味のあるルートであったが）者は、すぐその導入部である問題を示されるが、それはちょっと手を付けられた

<sup>34</sup> Yukio Iwakuma, Pierre Abélard et Guillaume de Champeaux dans les premières années du XII<sup>e</sup> siècle. Une étude préliminaire, in: Joël Biard (Hg.), Langage, sciences, philosophie au XII<sup>e</sup> siècle, Paris 1999, S. 93-123, S. 95-97; Christopher J. Martin, A Note on the Attribution of the „Litteral Glosses“ in Paris, BnF, lat. 13368 to Peter Abaelard, in: Irène Rosier-Catach (Hg.), Arts du langage et théologie aux confins des XI<sup>e</sup> et XII<sup>e</sup> siècle. Textes, maîtres, débats (Studia artistarum, Bd. 26), Turnhout 2011, S. 605-646, S. 643-645.

だけで、その後未解決のままにされている。しかも、ポルフェリオスの言うところでは、教科書にとっては余りにやっかいであるからだというのである。すなわち、アリストテレスが類 *genera* ないし種 *species* について語っているとき、彼は言語外的な現実の中に実際に存在していた量のことを言っているのか、それとも純粋に言語的なコンセプトのことを言っているのかという問題である<sup>35</sup>。伝統的かつ直観的には、同時代人たちにとって明らかに、論理学は現実の事物 (*res*) にかかわるというのが正しいように見えた。講義がこの前提に従う場合、同時代人たちは、事物における (*in re*) 弁証法が教えられていると言っていた。

しかしまさにこの立場が普通の道としてとおっていたので、反対の想定から出発した他の諸学校が学生の好奇心を引き付けた。そうした学校は、もしかすると1070年代に、しかし遅くとも1080年代には存在が知られている。そこでは、類と種は声 *voces* であり、つまり純粋に言語的なコンセプトであった。弁証法が(そう言われていたように) *in voce* で教えられた場合、生徒は、この学科が現実の事物を説明するものではないことを学んだ。そうではなく、それは、現実の言語的再現について省察するために存在するのであった。この種の弁証法

<sup>35</sup> Porphyrius, *Isagoge*, *Texte grec, translatio Boethii, traduction*, hg. v. Alain de Libera/Alain Philippe Segonds, Paris 1998, *Introd.* c. 2 (ed. de Libera, S. 1): *Mox de generibus ac speciebus illud quidem, sive subsistunt sive in solis nudis purisque intellectibus posita sunt sive subsistentia corporalia sunt an incorporalia, et utrum separata an in sensibilibus et circa ea constantia, dicere recusabo. Altissimum enim est huiusmodi negotium et maioris egens inquisitionis.* 形而上的な問題である、普遍の存在に対する問いとこの問題とを取り違えてはならない。この問題を形而上的なものへ向けた(「およそ普遍的な諸概念が存在するか?」)のは、アベラルドゥスが最初である。これらの立場を概念的に互いに分離するために、ここで議論されている問題は、やや回りくどく「プロト唯声論 Proto-Vokalismus」と呼ばれている。この点について規準を与えたのは、Y. Iwakuma, *Vocales* (2009) であったが、そこで岩熊は、彼の以前のアプローチに対するマレンボンの介入に反応したのである。John Marenbon, *Life, Milieu, and Intellectual Contexts*, in: Jeffrey E. Brower/Kevin Guilfooy (Hg.), *The Cambridge Companion to Abelard*, Cambridge 2004, S. 13-144, v.a. S. 26-34 で、ここでは普遍問題との関連も論じられている。Yukio Iwakuma, „Vocales“ or Early Nominalists, in: *Traditio* 47 (1992), S. 37-111.

は、類に注目することで動物ではなく「動物」というコンセプトを扱い、種に関しては人間でなく「人間」というコンセプトを扱うのであった。この意味において、最初に紹介した年代記は、この思考様式の見かけ上最も早期の代表者である教師ヨハネスについて、彼は論理学は言語についての学問である (*qui artem sophisticam vocalem esse disseruit*) と教えたと言っている。そこで *vox* が使われていることは、それどころか言語化という行為そのものを指示していた。つまり、武器庫としてでなく実践としての言語、「ラング *langue*」でなく「パロール *parole*」としての言語である。

ポルフェリオスの『イサゴーゲ』を解明した同時代の諸作品においては、新しい (*in voce*) 立場の到来が非常に客観的かつ淡々と記録されているのが見られる。それに対して、その他の証言、例えばバンベルクに伝わる教師ロスケリヌスとランのアルヌルフスに向けられた既述の風刺は、それについてむしろからかっている。つまり、論理学は言語に縮減されてしまうことに抵抗し、アリストテレスは、彼から掠め取られ音 (*voces*) だと宣言された事物 (*res*) ゆえに声高に訴え、ポルフェリオスは彼の読者が彼から彼の物 (*res*) を取り去るがゆえに、ため息をつく、というのである<sup>36</sup>。カンタベリのアンセルムスにおいてはもう既に、同じことがより厳しく述べられた。彼は1090年代の初めにロスケリヌスを「全宇宙は声によって作り出された微風に他ならないと見なす」ような、そしてそれゆえ宗教的な事柄に関する議論から遠ざけられるべきであるような「異端弁証法学者」の一人に数えた<sup>37</sup>。この立場がもっと切迫した諸問題によって覆われてしまっても、久しい12世紀中頃になってもなお、フライジングのオットーとソールズベリーのヨハネスはこの理論とその代表者としてのロスケリ

<sup>36</sup> Y. Iwakuma, *Vocales* (1992), S. 43-45 に引用されている。

<sup>37</sup> Anselm von Canterbury, *Opera omnia* (6 Bde in 2 Bden), hg. v. Franz Salesius Schmitt, Stuttgart-Bad Cannstatt 1968 [注における巻数とページ数は本来の6巻本 Seckau/Rom/Edinburgh 1938-1961 による]。Bd. 1, S. 285.4 (*Epistola de incarnatione verbi, prior recensio*): *Illi utique dialectici, qui non nisi flatum vocis putant universales esse substantias, et qui colorem non aliud queunt intelligere quam corpus, nec sapientiam hominis aliud quam animam, prorsus a spiritualium quaestionum disputatione sunt exsufflandi*。これについては、*ebd.*, S. 289,17 u. Bd. 2 (*Epistola de incarnatione verbi*), S. 9,20。更に C. J. Mews, *Reason* (2002), 6 - S. 55-98; 7 - S. 4-34 も参照。

ナスを想起したのである<sup>38</sup>。

二つの正反対の立場の成立は、したがって更なる発展にとって示導的なものであった。弁証法は現実の学問なのか、それとも言語の学問なのか？ これら二つのパラダイムは、高等な知そのものに関係していたのであり、知の対象にはなかった。知は「自己省察的次元」を獲得し、この次元は学校におけるコミュニケーションの中でただちに生きた実践へと転化し、忠誠と一線を画する態度、同盟と敵対関係のきっかけとなった。二つの立場は生活世界における意義をとりわけ、それぞれの対抗する立場が存するという事情から引き出していたように見える。「他者化 othering」による自己確認がその帰結で、高等な知は、競合する立場について語られる過程で、反省的なものとなったのである。

それが成立しつつあった学問的領域をその初期の局面において構造化したというこの理由により、反対派は後続世代の記憶にも入り込んだ。ルールでラインベルトゥスという名の教師が *in voce* の弁証法を教え始めた時、ある歴史叙述者の語るところでは、近くのトゥールネイの生徒たちが不穏な状態になった。というのもそこでは教師オド（みずから教師オダルドゥスと名乗っていた）が *in re* の伝統を守って教えていたからである。生徒たちはいつもながらのメインストリームよりも新しい立場をより面白く感じたようである。騒ぎは拡大した。正しいのは誰か？ ラインベルトゥスの方向は、ある党派的な報告者によって当節はやりのがらくたと誹謗され、語られたところでは、一人の都市で知られた見者、聾啞者が判定者として呼び出された。見者は身振りで、オドの保守的な *in re* の立場のほうが堅固で、ラインベルトゥスの *in voce* の教説はそれに対して浅薄なナンセンスだと知らせた。オドの立場について彼は、自分の右

<sup>38</sup> Otto von Freising/Rahewin, *Die Taten Friedrichs oder richtiger Cronica*, hg. v. Adolf Schmidt/Franz-Josef Schmale (*Ausgewählte Quellen zur deutschen Geschichte des Mittelalters – Freiherr vom Stein-Gedächtnisausgabe*, Bd. 17), Darmstadt 1965, 1.50, S. 224,29; Roscelin, *qui primus nostris temporibus in logica sententiam vocum instituit* [...]; Johann von Salisbury, *Metalogicon*, hg. v. J. B. Hall/K. S. B. Keats-Rohan (CCCM, Bd. 98), Turnhout 1991, 2.17.18, S. 81. もちろんヨハネスにとっては新論理学 *logica nova* (より正確にはトポス論) 以前のあらゆる立場が時代遅れに見えたに違いない。それなくしては、方法にしたがう代わりに偶然の論理によって議論しているのだから (*Nam sine eo non disputatur arte, sed casu*). Ebd., 3.10, S. 130-139, 引用は 3.10.27, S. 131.

手の指を犁のようにして左の手の平の上へ引いた。100%正しいのだから (doctrinam eius esse rectissimam) オドの教説は深遠だというのである。おそらくラインベルトゥスはその場にいなかったのも、彼は続いて指でリールのほうを示し、手を口に当てて息を吹きつけ、それによって「教師ラインベルトゥスの教説はほら吹きの変言に他ならない」ことを知らせたのである<sup>39</sup>。学問と同様に、そのより抽象的な立場に対する嘲りも古くから存在するわけである。

自らの行為に対する反省的な態度の構成要素はつまり、自分の師が採る立場に対して別の選択肢が存在するという意識であった。アルベリクス・デ・モンテの学校では12世紀中頃に、師が彼の基本諸原理 (principales positiones) においてアベラルドゥスと違っているという意識が重要な役割を果たすことになる。リストには、自らの師に特徴的と見なされた教義が添えられている。「我らの師アルベリクスの見解について」という表題のもとに、例えば次のように書かれている。「それゆえ以下のことが知られるべきである。我々の見解の14の主要な原理が存するが、そのうち5つは仮定的な、9つは範疇的な[前提]から成っている。」暗示されているだけとはいえ、続く文章はその意味を、ここではアベラルドゥスに反対して向けられた教説がスケッチされているという意識から引き出している<sup>40</sup>。

知の秩序における第二の革新は、知の紀律的な秩序が次第に発見されてきたという点に関わっていた。さまざまな知の領域があり、それらが異なる仕方でも活動しさまざまな方法で異なる前提条件に従っているということは、共有されていた。誤ってそう考えられている反弁証法論者たちは、世紀の中頃以来、論理学や自然哲学が神の全能性という問題に手を付け始めたのに対して、人間の知の限界を想起させていた。論理的な人間理解と、神の啓示に近づこうとし、それゆえ問いを発する人間の信仰を前提条件とする知とのこの関係は、将来的にも難しい領域であり続け、知の受容ないし非受容の試金石となることもしば

<sup>39</sup> Hermann von Tournai, Liber 2, S. 275, 13-38. この逸話は Scott G. Bruce, *Silence and Sign Language in Medieval Monasticism. The Cluniac Tradition, c. 900-1200*, Cambridge 2007, S. 175 で扱われている。

<sup>40</sup> Y. Iwakuma, Alberic (2013), S. 30f.: Unde sciendum est quod principales nostrae sententiae positiones sunt quatuordecim, quarum quinque consistent in hypotheticis, novem in categoricis. 対応する諸原理が後に続いている。

しばであったが、最良の場合には、我々がペトルス・ダミアニの例に見るように、大きな知的挑戦であった。そのような諸矛盾を解消する標準的な方法は、諸学問相互の内部関係における学問の上下秩序にあった。受容されるためには、弁証法は目に見える形で神学に対して奉仕する関係にあるということが必要であった。

これほど激しくなく、負荷がかかっているわけでもない専門知の相対性に関する省察は、「トリヴィアルな」諸学問の分化において始まった。つまり、それほど危険でなく、そう簡単には精神の完全動員へと人を煽り立てないような分野においてである。オルレアンに由来するある写本で伝承されている28の論理学に関する作品のうちの一つにおいて、匿名の学生が、シャンポーのグイレルムスがポエティウスの論文の中のテキスト箇所について教えていたことに以下のような注釈を付している<sup>41</sup>。

「しかしグイレルムス師は言う。すべての前提と[すべての]問いには二通りの意味がある。文法的な意味と論理学的な意味である。例えば「ソクラテスは白い」は、「ソクラテスは白い事物である」という文法的な意味と「白はソクラテスにその根拠を持つ」という論理学的な意味を持つ。更に「ソクラテスは人か人でないか」という問いは、それが本来生じさせる文法的な意味と「述語は主語に内在するか」という論理学的な意味を持つ。この後の意味は、ポエティウスによれば、すべての述語的な問いに共通なので

<sup>41</sup> テキスト箇所は、Boethius, *De differentiis topicis*, in: Migne, *Patrologia Latina*, Bd. 64, Sp. 1173-1216, 1, Sp. 1177B. 注釈は Neils J. Green-Pedersen, William of Champeaux on Boethius' „Topics“ according to Orléans Bibl. Mun. 266, in: *Cahiers du Moyen-Âge grec et latin* 13 (1974), S. 13-30, S. 21f.: *Magister tamen W dicit unamquamque propositionem et quaestionem habere duos sensus: unum grammaticum et alium dialecticum. Verbi gratia „Socrates est albus“ habet hunc grammaticum „Socrates est alba res“ et hunc dialecticum „albedo inhaeret Socrati“. Et iterum haec quaestio „utrum Socrates est homo vel non est homo“ habet illum grammaticum quem proprie generat, et hunc dialecticum „utrum praedicatum inhaerat subiecto“, quem hic dicit Boethius esse communem omnibus praedicativis quaestionibus.* 師の名は注釈のうちの一つでは「W.」でなく「Wille.」と略されている。更に、ここで代表されている立場は、アベラルドゥスによって彼の以前の師であったシャンポーのグイレルムスに帰されている。ebd. u. S. 15を参照。この点については、以下の論述を見よ。

ある。」

グイレルムスは明らかに、彼の講義の中で、ポエティウスのこの箇所を異を唱えた。事物はより複雑なのであって、文法と弁証法は同じ言明を観察してもさまざまなものを見るのだ、というのである。彼の弟子たちはこの教説の一部を受け入れ、一部は受け入れなかった。アベラルドゥスは後に、前提の二つの区別された「意味」からすべからく出発していた、グイレルムスの「取り巻きたち」を想起した<sup>42</sup>。しかし、彼の注釈作品に注記した聴き手は、この教説をそれと結びついた含意のゆえに拒否した。それが当たっているなら、彼が言うところでは、場合によってはもっと多くのそうした意味が存在するのであり、つまり4つの意味がありうる。文法的意味と弁証法的意味の他に、物理的意味と倫理的意味がある<sup>43</sup>。「物理的」と「倫理的」は、そうすると哲学 *philosophia* のすべての領域が考慮されねばならないということを示すために、よく考えて選ばれていた<sup>44</sup>。これは以下のことを意味した。つまり、文法的な意味と論理的な意味が区別されるのであれば、すべての専門分野はそれ自身の概念と論理

---

<sup>42</sup> Abaelard, *Scritti filosofici*, hg. v. Mario dal Pra (Nuova Biblioteca Filosofica, ser. 2, Bd. 3), Rom/Mailand 1954, S. 271, 38 (Super topica glossae): Et profecto praeceptor noster Willelmus ejusque sequaces duos sensus tam in propositionibus quam in quaestionibus assignabant. Quorum unum grammaticum, alterum dialecticum appellabant. Dicebant enim quod cum dicitur „Socrates est albus”, alia est coniunctio rerum quam grammatici, alia quam attendant dialectici.

<sup>43</sup> N. J. Green-Pedersen, *William* (1974), S. 22. この立場が、Green-Pedersen が主張したように、「人を承服させるというよりはもっと面白い」ものなのかどうかは、ここではおくことにしよう。

<sup>44</sup> 例えば同時代の偽ラバヌスがそうしているが、そのイサゴージェ注解は場合によってはそれ自体グイレルムスの教説の産物であったかもしれない。Dividitur enim philosophia in tres partes: physicam, ethicam, logicam. Y. Iwakuma, *Pseudo-Rabanus* (2008), S. 68. 物理的、倫理的、論理的という哲学の3区分とそれに対するもろもろの対案については、Yukio Iwakuma, *The Division of Philosophy and the Place of the Trivium from the 9th to the Mid-12th Centuries*, in: Sten Ebbesen/Russell L. Friedman (Hg.), *Medieval Analyses in Language and Cognition. Acts of the Symposium of The Copenhagen School of Medieval Philosophy*, January 10-13, 1996, Kopenhagen 1999, S. 165-189, S. 166.



に従っていると想定しなければならないのではないか、ということである。そして実際、未来はまさにこの想定に属することになる。12・13世紀の諸学問教説、例えばアル・ファラービーに触発されたスペイン人ドミンゴ・グンサルヴィ（ドミニクス・グンディッサリヌス）のそれは、まさにこの考え方の上に築かれることになる。それらは、専門分野それぞれの対象、諸部分、課題、目標、道具、参照テキスト等を解説することによって、専門分野への導入を行うことになるであろう<sup>45</sup>。「すべての学問はそれぞれ自身の基礎としてのみずからの規則に基づいている」とグイレルムスから100年後にリールのアラヌスは確認することになる。「完全に人間の満足と意志のうちにある文法と、人間の設定だけに存するような規則を除いて、他のすべての学問は自身の規則を持っており、それらの規則を基礎とし、安全な境界のようにそれらの規則によって取り囲まれている<sup>46</sup>。」

そのように考えると、専門分野の視角の交錯から認識上の利益を得ることも

---

<sup>45</sup> 典型的な例は Dominicus Gundissalinus, *De divisione philosophiae - Über die Einteilung der Philosophie*, hg. v. Alexander Fidora/Dorothee Werner (Herders Bibliothek der Philosophie des Mittelalters, Bd. 11), Freiburg i. Br./Basel/Wien 2007. 基礎にある図式については、Alexander Fidora, *Die Wissenschaftstheorie des Dominicus Gundissalinus. Voraussetzungen und Konsequenzen des zweiten Anfangs der aristotelischen Philosophie im 12. Jahrhundert (Wissenskultur und gesellschaftlicher Wandel, Bd. 6)*, Berlin 2003. 活発に研究されてきたテーマである、当時の学問論については、Frank Rexroth, *Wahr oder nützlich? Epistemische Ordnung und institutionelle Praxis an den Universitäten des 13. und 14. Jahrhunderts*, in: Andreas Speer/Andreas Berger (Hg.), *Wissenschaft mit Zukunft. Die „alte“ Kölner Universität im Kontext der europäischen Universitätsgeschichte (Studien zur Geschichte der Universität Köln, Bd. 19)*, Köln 2016, S. 87-114, S. 94-96 および注にある文献指示を見よ。

<sup>46</sup> Alanus ab Insulis, *Regulae theologiae*, hg. v. Andreas Niederberger/Miriam Pahlmeier (Herders Bibliothek der Philosophie des Mittelalters, Bd. 20), Freiburg i. Br. 2009, S. 48: *Omnis scientia suis nititur regulis velut propriis fundamentis et, ut de gramatica taceamus quae tota est in hominum beneplacitis et voluntate et de eius regulis quae sunt in sola hominum positione, cetere scientiae proprias habent regulas quibus nituntur et quasi quibusdam certis terminis clauduntur.*



可能となった。プリスキアヌスの文法を弁証法の眼鏡を通して観察したならば、何が起きたであろうか？ つまり、例えば文法的な人（一人称単数としての「私」）を弁証法的な観察方法に服せしめ、この私は *realiter* に理解されるのか *vocaliter* に理解されるのかという、そこに存する緊張を研究した場合に、どうなったであろうか？ 既に述べた『グロスーレ』の匿名著者はこの見方に魅了され、そして明らかに彼の魅惑は、この作品を授業で使用し、これについて省察した一連の教師と生徒に伝わっていった<sup>47</sup>。文法と弁証法の関係はそれを通じて変化した。文法は弁証法にほとんど統合され、しかしそれによって同時に、真実の認識にあたって新しい役割を割り当てられた。「文法はちょうどその類へと同じように論理学に帰される」のである<sup>48</sup>。

そうした「越境的」省察は、文法の参照テキストと弁証法のそれとの分離の意識だけでなく、問いと見方の相違の意識をも前提としていた。しかしこのようにして、そうした省察は、認識の進歩だけでなく、認識の進歩の可能性への感受性をも可能とした。そのように作業すれば、人はボエティウスを、いやそれどころかアリストテレスをも越えて先へ進むことができたのである。「新しい」著者たちは、「古い」著者たちには考えられなかったであろうような立場を採ることができた<sup>49</sup>。知の進歩は解釈と理解の進歩として理解されたのである。

それによって、高等な知と接することには新しい時間インデックスが与えられた。ここで、既にリチャード・サザンが観察したような「古い」と「新しい」ないし「若い」の概念の遷移が始まる。「若い人たち *moderni*」として、それま

---

<sup>47</sup> C. J. Mews, *Reason* (2002), 7 – S. 4-34, 本文で挙げられた例については、S. 12-16を参照。『グロスーレ』に関する研究については、前掲注6を参照。

<sup>48</sup> Margaret Gibson, *The Early Scholastic „Glosule“ to Priscian, „Institutiones Grammaticae“*. *The Text and its Influence*, in: *Studi Medievali* 20 (1979), S. 237-254, S. 250,54. ヴォカリストの学問論において文法が論理学の一部であったことについては、Y. Iwakuma, *Division* (1999), v.a. S. 178.

<sup>49</sup> 弟子の一人が報告しているように、アベラルドゥスはこの立場を教えていた。Johannes von Salisbury, *Metalogicon* (wie Anm. 38), 3.4.34, S. 116: *Dixisse recolo Peripateticum Palatinum quod uerum arbitror, quia facile esset aliquem nostri temporis librum de hac arte componere, qui nullo antiquorum quod ad conceptionem ueri, uel ad elegantiam uerbi esset inferior. Sed ut auctoritatis fauorem sortiretur, aut impossibile aut difficillimum.*

では、古代・異教的小説および教父の著者と現在との間の仲介者として機能していた著者たちを、たとえ彼らが3・4世紀前に生きていた場合であっても、呼んでいた。しかし今や、11世紀の終わりには、2世代前の教師たちが、たとえ彼らの意見が前述の注釈作品において不明瞭にしか現れず、古典的な意味での一つの作品と言えないような場合でも、*moderni* と呼ばれ始めた。若い *modernus* という概念は現在に近づき、同時代人、最近死んだ人たち、そして明らかな形で現在と関連性を持った著者たちの教説と著作を指すようになった。彼らのごく最近に生き活動していたのである。*Antiqui* と *moderni* の境界は、どの著作、どの作品が現時点で特別な注目に値するかを示す「動く壁」になった<sup>50</sup>。

遅くとも1099年に書かれたに違いないテオドゥル注解は、「新しい *moderni*」文献注解はもはや「古い *antiqui*」その基準によって構造化されておらず、それらは自身のパラメーターを優先し、それによってより多くの成功を収めるのであると宣言している。うやうやしく、この注解の著者ユトレヒトのベルンハルドゥスは「古人」と「近人」の権威を衡量し、結果として後者の優越を確認している。それでも、プリスキアヌスが既に、人間は若いときのほうが老年よりもよく見える (*tanto iuniores, quanto perspicaciores*) と言っていた。このメタファーは二重の意味を持ったとはいえ、以後これは、同時代人が尊敬すべき伝統の業績をも凌駕しようという意味でも使われていく<sup>51</sup>。こうして写本には、同時代の教師たちの名詞化された動詞に関する見解はどのようなものであったかが、まとめられることになったのだと思われる<sup>52</sup>。

そしてグイレルムスの弟子の一人はある注釈作品の中で次のように注記し

<sup>50</sup> R. W. Southern, *Humanism* (1995), S. 185-189.

<sup>51</sup> *Accessus ad auctores*: Bernard d'Utrecht, Conrad d'Hirsau: *Dialogus super auctores*, hg. v. Robert B. C. Huygens, Leiden 1970, S. 66,203: [...] *moderni* [...], qui quanto tempore posteriores, tanto indagazione sunt discretiores. これについては C. J. Mews, *Logica* (2005), S. 97f.; プリスキアヌスの定式については、Hubert Silvestre, „Quanto iuniores, tanto perspicaciores“. *Antécédents à la Querelle des Anciens et des Modernes*, in: *Recueil commémoratif du Xe anniversaire de la Faculté de Philosophie et Lettres* (Publication de l'Université Lovanium de Kinshasa, Bd. 23), Louvain 1968, S. 231-255.

<sup>52</sup> C. J. Mews, *Logica* (2005), S. 101.

た。グイレルムス師は、ポエティウスの「箇所」を論じる際に、ポエティウスが知るよりももっと多くの「箇所」があるとコメントし、一覧を付け加えた、と。二人のうち一人がここではうそをついているに違いないと、これについて弟子は言っているが (Aut hic mentitur Boethius aut magister W)、しかしすぐに急いで、これについても二つの意見が存するとしている。「しかし、何人かの者たちが言うには、ポエティウスもグイレルムス師もうそをついていない。というのもポエティウスはこの本の中で、彼の時代に使われていた「箇所」のみを扱ったのであり、それに対してグイレルムス師は[まさに]別の「箇所」のことを語っているのである。」これは、歴史性というまったく別の指導原理によって真実に関する言説を論じるという方法の端緒なのであろうか？ いずれにせよこれは、知とそれを開発するための技術がこの新しい時間インデックスに従って変化しただけでなく、この種の変化に関する意識が学問的思考そのものの一部になった、ということを証言しているのである。

新しい知の秩序における最後の変化は、しかしそれによってはまだ起きていない。グイレルムスの弟子が、ポエティウスの「箇所」に関する言明で師が「うそをついた」かどうかを省察したとき、彼が用いたのは習い覚えた意味論で、それは学者の反論がうそ、罪、倫理的あやまちをめぐる語分野から取ってきたものであり、我々が既にみた「英雄たち」についても知っているところである<sup>53</sup>。その著作『ヴォルフヘルム駁論』において聖堂参事会員マネゴルトはこの

---

<sup>53</sup> 更なる例として、「それゆえアリストテレスは彼の著書においてうそをついているが、これは普通でないことである。」Y. Iwakuma, *Masters Named in the Logical Texts After ca. 1120*, <http://www.s.fpu.ac.jp/iwakuma/papers/MastersII.pdf>. [zulezt 2018-04-06], (o.D.), zu 13.40. 「ある者が「ソクラテスは人間である。プラトンは哲学者である。そして太陽は天にあるのではない。」と言うならば、その者はうそをついている。」Ebd. zu 15.13. また ebd. zu 17.25 も参照。生活実践上の必要なうそが一つランのアンセルムスの弟子たちによって報告されている。すなわち、彼らの師が死んだとき、弟子たちは、師の母が苦痛を生き延びられないのではないかという恐れから、3日間彼女に師の死を秘した。弟子たちは、師は大司教のもとへ行っているといううそをついた。C. Giraud, *Anselm of Laon in the Twelfth-Century Schools. Between fama and memoria*, in: Lucie Doležalová (Hg.), *The Making of Memory in the Middle Ages*, Leiden 2010, S. 328-346, S. 338.

語彙を広く用い、それどころか彼は誤りを異端と結びつけていた<sup>54</sup>。他の者たちは、彼らがトゥールのベレンガリウスと論争した際、彼の立場の信用を失わせるために、彼の倫理的潔白さと精神的能力を疑問視していた<sup>55</sup>。「ベレンガリウスとその追従者たちの汚らわしい声に反対する」論駁は、およそ彼らの倫理的欠陥に対する論難を含んでいた<sup>56</sup>。カンタベリのアンセルムスは、三位一体に関するロスケリヌスの見解を、能無しの不毛な考えであるかのように、コメントした。そしてアンセルムスは、教皇ウルバヌス2世を介入させた。念には念をとというわけである。この問題について以後数年ロスケリヌスのことは聞かれなくなった<sup>57</sup>。アベラルドゥスその人も、彼の師ロスケリヌスのある一定の確信を、あたかもその創始者が病的なケースであったことが判明したかのように、描くことになる<sup>58</sup>。

この種のことを、自らによって管理された知を変化しうるまた議論されうるものにとらえる学問は、行うことができなかった。より意味があったのは、語られたものについての真実性の判定とそれを語る者に関する倫理的判定との間に境界線を引くことであった。確かに方法的な「厳密さ *rigor*」に固執するが、しかしそこで人はそれでも間違えるという行為をすることができるという空間

<sup>54</sup> Manegold von Lautenbach, *Liber contra Wolfelmum*, hg. v. W. Hartmann, (MGH Quellen zur Geistesgeschichte des Mittelalters, Bd. 8), Weimar 1972, 6, S. 54-57.

<sup>55</sup> Guitmund von Aversa, *De corporis et sanguinis Christi veritate in eucharistia libri tres*, in: Migne, *Patrologia Latina*, Bd. 149, Sp. 1427-1494, 1, Sp. 1427C.

<sup>56</sup> Robert Somerville, *The Case against Berengar of Tours. A New Text*, in: *Studi Gregoriani* 9 (1972), S. 55-75, S. 58: *Contra spurcissimas Berengarii ejusque successorum voces*.

<sup>57</sup> Anselm von Canterbury, *Opera omnia*, Bd. 2 (Epistola de incarnatione verbi), S. 3-10. Constant J. Mews/Clare Monagle, *Theological Dispute and the Conciliar Process 1050-1150*, in: Christoph Dartmann/Andreas Pietsch (Hg.), *Ecclesia disputans. Die Konfliktpraxis vormoderner Synoden* (HZ Beiheft, Bd. 67), Berlin [u.a.] 2015, S. 127-157, S. 140-147.

<sup>58</sup> Abaelard, *Dialectica*, hg. v. Lambert Marie de Rijk, 2. Aufl., Assen 1970, 5, S. 554,37: *Fuit autem, memini, magistri nostri Roscellini tam insana sententia ut nullam rem partibus constare vellet, sed sicut solis vocibus species, ita et partes adscribebat*. その後、彼はこの教説を論駁し始めた。

においてのみ、知は学問として存在することができる。誤りは知の秩序自体の一部とならねばならず、同時に徳、罪、間違っ導かれた倫理という倫理的なパラレルワールドに属することは許されなかった。間違いといっても、いかにうまくいかないかを示すという功績を有していたのである<sup>59</sup>。

ここでも新しい弁証法が決定的なことを成し遂げた。それこそが、真実なるものの認識を真実の言語的言明に結びつけるこの弁証法の真実コンセプトとともに、誤り、間違い、誤った帰結の、いわばより害がなくより世俗的な理解を提供したからである。シャンポーのグイレルムスの周囲で成立した注解の一つ、いわゆる『偽ラバヌス』をのぞいてみよう。そこではポルフュリオスの『イサゴゲ』が解説されており、この目的のためにポエティウスの注解も引かれていた。その注解ではまた、誤ったものの定義も手に入れることができた。「というのは、事物がそうであるのと別なように理解されたものは、間違っている。」とポエティウスは第二の注解で書いていた<sup>60</sup>。これがグイレルムスと彼の弟子たちに、誤ったもの、間違い、誤謬について省察する機会を与えた。

間違っ判断は間違っ知覚によって成立する。それらは「偽りにして無益、偽りにして空虚 *falsum et vanum, falsum et vacuum*」であり、それはつまり、それ以上に追求しなくてもよいということである。誤りは袋小路としての言明や結論だということになる。そうした偽り *falsitates* は、正しくない精神的結合によって成立する、例えば理性が馬を人と掛け合わせてそこからケンタウルスを創るような場合である<sup>61</sup>。しかしそうしたものは、たちの悪いものではないし、狭い意味で危険なものでもない。名詞と動詞は、それ自体としては、そもそも真実でありえない。結合と分割からはじめて真と偽が生じるのであり、

---

<sup>59</sup> Niklas Luhmann, *Die Wissenschaft der Gesellschaft*, Darmstadt 2002, S. 253. その背後には、学問の「組織された懐疑主義」という観念が存する。Robert King Merton, *Science and Democratic Social Structure* (1942), in: ders., *Social Theory and Social Structure*, Rev. edn. New York 1968, S. 604-615, S. 614f.

<sup>60</sup> Boethius, In *Isagogen Porphyrii commenta*, hg. v. Samuel Brandt (*Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latinorum*, Bd. 48), Wien/Leipzig 1906, 1.10, S. 163,18: [...] id est enim falsum quod aliter atque res est intellegitur.

<sup>61</sup> 該当するテキスト箇所におけるすべての史料根拠は、Y. Iwakuma, *Pseudo-Rabanus* (2008), S. 77-83. S. 191 には、*falsificare* という動詞についての、注解中で唯一の史料根拠が見られる。

アリストテレスにもそのように書かれていた、というのである。ポエティウスとそれに続いた二人の匿名の注釈者たちは、このような見方を自分のものにしていた<sup>62</sup>。諸前提は正しいかあるいはまさに間違っているかどちらかの言明であり、「偽」と「真」は左右対称の反対概念であり、思考上の秩序が意図的に誤りを目指してすすみ、それを真であると読み替えようとする場合にのみ、学者たちは激しい論難の砲火にさらされ、正当な論理学と誤った詭弁との間にはっきりした境界線を引かねばならなかった<sup>63</sup>。アベラルドゥスもまた、『然りと否 Sic et Non』で、誤りをうそと罪の観念から解放放つことによって、探求して問いを発するという行為に肩入れすることになるが、そうした解放は彼にとって難しくはなかった。しかし、ある言明が真ないしまさに偽と評価されうるためには、どのような前提条件が存在しなければならないかという問題は、注釈者たちが取り組み続けたものであった<sup>64</sup>。「雄やギ」と「鹿」が「雄やギ鹿」(hircocervus)へと組み合わせられた場合、一体何が起きるのであろうか。真である言明が「すべての omnis」を付け加えることによって偽になる、ということがありうるか。「すべてのソクラテスは人間である」のであろうか<sup>65</sup>。このような場合に判断を下すことが論理学の目的なのである<sup>66</sup>。

この世俗的な間違いと誤りの概念が、多くの人が語りまた書き、弟子たちが

<sup>62</sup> Aristoteles, Philosophische Schriften. 6 Bde, übers. v. Eugen Rolfes/Hermann Bonitz/Willy Theiler u.a., Darmstadt 1995, Bd. 1 (Peri Hermeneias 16a), S. 1. これについては、Boethius, Commentarii in librum Aristotelis „Peri hermeneias“, hg. v. Karl Meiser, Leipzig 1877, S. 43-45 およびやはり伝統的にアベラルドゥスに帰されているいわゆる字句注釈 Editio super Aristotelem de Interpretatione in Abaelard, Scritti filosofici, S. 75 を参照。この帰属は C. J. Martin, Note (2011), S. 640f. で疑われている。

<sup>63</sup> Propositio est oratio verum falsumve significans. 引用されているのは Sten Ebbesen, An Argument is a Soul, in: Irène Rosier-Catach (Hg.), Arts du langage et théologie aux confins des XI<sup>e</sup> et XII<sup>e</sup> siècle. Textes, maîtres, débats, Turnhout 2011, S. 695-708, S. 700 (ランのアルヌルフス(?)のこれに関する注釈付き)。詭弁から弁証法を区別するという試みを、アベラルドゥスは彼のいわゆる書簡13で行うことになる。

<sup>64</sup> A. Grondeux/I. Rosier-Catach, Glosule (2011), S. 162.

<sup>65</sup> Y. Iwakuma, Vocales (1992), S. 72f.

<sup>66</sup> Gerland von Besançon, zitiert bei M. M. Tweedale, Logic (1988), S. 198.

彼らの師を正しいかそうでないかという前提のもとに評価するような環境において、「真の」言明の優越性に対する信頼によって安定させられねばならなかったのは、よく理解できることである。それに基づいて、「真実」を規制的理念として学問的な実践の基礎にすえることが可能であったのである。この点には古代の参考文献の功績が存する。つまりそれらが、倫理的な弾劾に門戸を開くことなく、緊張と抽象化そしてそれゆえ間違いをおかさないとという努力へときっかけをあたえるような、真実の観念を媒介したのである。ポエティウスが『イサゴージェ』に対する彼の第二の注解で宣言している箇所を、ポエティウスの解釈者たちも基準にすることができた。つまり、ポルフェリオスの著作では「事物の認識が」追求されており、それゆえ彼、翻訳者にして注解者たるポエティウスも「輝かしい言葉という優美さでなく、偽りのない真実」を得ようと努めたのだ、というのである<sup>67</sup>。

要約すると、このような認識プロセスは、その担い手たちの理解においてはずっと古いものであったが、歴史の長い諸局面の間忘れられていた。それが今や再び受け入れられ、楽観的に継続されたということ、より新しい知がより古い知を洗練し、改善し、それどころか凌駕しえたということは、明らかである。新しい知が古い知にまさりうるという理解は、既に見たようにこれまでヨーロッパ史のもっと後の時代に帰されてきた。しかし、我々は、ここ古代後のnachantikeヨーロッパで、それに初めて出会うのである。そして我々は、それがすぐ、12世紀中頃よりも前に、大いに注目を引き付けるのを、見ることになるのである。

(訳者後記)

本稿は、2018年3月21日に、京都大学で開催された関西中世史研究会において、フランク・レックスロート教授が行った講演の翻訳である。翻訳公表に向

---

<sup>67</sup> Boethius, In Isagogen Porphyrii commenta 2, S. 135,5: Secundus hic arreptae expositionis labor nostrae seriem translationis expediet, in qua quidem uereor ne subierim fidi interpretis culpam, cum uerbum uerbo expressum comparatumque reddiderim. Cuius incepti ratio est quod in his scriptis in quibus rerum cognitio quaeritur, non luculentae orationis lepos, sed incorrupta ueritas exprimenda est. これについては、C. Vogel, Übersetzungsprojekt (2016), S. 7f. u. 131f. を参照。



けた準備の過程で、教授には本文の一部を追加していただき、また詳しい注を補っていただいた。同教授は、記者が研究代表をつとめる JSPS 科研費基盤 B (16H03535) の費用によって来日し、約 1 週間滞在された。多忙な日程の合間を縫っての遠路の来日、長時間に亘る講演と議論、注による補足作業など、すべてについて、レックスロート教授に深く感謝する。また、佐藤公美教授（甲南大学）、服部良久教授（京都大学名誉教授）をはじめ関西中世史研究会の皆さんにも、厚く御礼を申し上げる。

フランク・レックスロート教授は、現在、ドイツ中世史学界を代表する研究者の一人である。1960年に生まれ、1988年にフライブルク大学で歴史学の博士号を取得、ロンドンのドイツ歴史研究所研究員を経て、1998年にベルリン・フンボルト大学で教授資格を取得、1999年にビーレフェルト大学教授となった後、2000年からゲッティンゲン大学正教授として現在まで在職されている。大学の職の他にも、ゲッティンゲンのニーダーザクセン州アカデミーの正会員、コンスタンツ・中世史研究グループの副会長、『歴史学雑誌 Historische Zeitschrift』の編集委員、モヌメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ中央委員会委員等数多くの要職を占めておられる。また上述のロンドンの他、アメリカ合衆国のカリフォルニア大学ロサンゼルス校とプリンストン大学でも、在外研究を経験された。

研究業績のうち、著書としては、中世後期ドイツ・ライヒにおける大学設立を比較検討した 学位論文に基づく *Deutsche Universitätsstiftungen von Prag bis Köln. Die Intentionen des Stifters und die Chancen ihrer Realisierbarkeit im spätmittelalterlichen deutschen Territorialstaat* (Beihefte zum Archiv für Kulturgeschichte, Bd. 34), Köln 1992、中世後期ロンドンにおける当局と周縁集団の関係を扱った教授資格取得論文に基づく *Das Milieu der Nacht. Obrigkeit und Randgruppen im spätmittelalterlichen London* (Veröffentlichungen des Max-Planck-Instituts für Geschichte, Bd. 153), Göttingen 1999 (これには英語訳 *Deviance and Power in Late Medieval London* (Past and Present Publications), Cambridge 2007 がある)、ドイツ中世史の特徴的な概説である *Deutsche Geschichte im Mittelalter* (Beck Wissen), München 2005/2007/2008 が公刊されており、いずれも高い評価を受けている。編著も *Beiträge zur Kulturgeschichte der Gelehrten im späten Mittelalter* (Vorträge und Forschungen, Bd. 73), Ostfildern 2010 など多数にのぼる。研究分野は、西洋中世の大学史、社会史、都市史、文化史、中世研究の学問史など幅広い領域に及んでいる。



本講演は、注1にもあるように、西洋中世における知識人の登場を扱った近著の一部をレックスロート教授に提示していただき、日本人研究者との議論の素材としたものである。内容は、大学成立前夜の知的世界の状況について、従来とられてきた二通りの理解とはまた異なる認識を打ち出すもので、誰か特定の学者や、およそ教師のみに焦点をあわせるのではなく、むしろ教師と弟子たちの間の相互作用を重視する点がとりわけ興味深い。そうした認識が、日本の岩熊幸男氏をはじめとする学者たちの、この時代の学問についての最先端の研究を踏まえていることも、注を一瞥すれば明らかであろう。講演後の質疑応答では、他の学問分野との比較や、こうした知的状況の社会的背景、史料の伝承・利用状況など、多岐にわたって長時間の議論が交わされた。レックスロート教授をはじめ、討論参加者に改めて感謝申し上げます。拙訳を通じて、扱われたテーマとレックスロート教授の仕事について、更に興味を持っていただければ、訳者としては幸いである。